

与えられたラスト・チャンス

(3度目は絶対に許されない)

既に旧聞に属することで恐縮だが、やっぱりというか当然というか、みどり銀行が債務超過に陥って実質的に破綻し、阪神銀行に併合されることとなった。みどり銀行の前身は、バブルで名をはせたあの兵庫銀行である。兵庫銀行の危機が露出したのは確か92年末であった。この時の危機は当局主導で(大手銀行に資金を融通させた)乗り越えたが、このままでは危ないということで翌年元銀行局長という大物官僚OBを兵庫銀行頭取に送って「当局がサポートする」というメッセージを市場に伝えた。この頃の兵庫銀行の株価は、記憶に間違いないとすれば5~600円していた。私は空売りをかけたい誘惑に駆られたが、職業職務柄断念した。しかし、兵庫銀行が再建出来るとは露ほども思わなかった。

その後ご存知の通り、95年夏兵庫銀行は元銀行局長の威光も及ばず破綻し株券は紙屑になった。しかし、阪神淡路大地震の影響覚めやらない状況下で地元銀行を潰すのは影響が大きすぎるという大義を大上段に振りかざし、当局は責任回避の動きに走った。その産物が今回破綻したみどり銀行である。地元を中心として心有る企業等が出資に応じ新生銀行としてスタートしたのだが、そもそもスタート時点からブラックホールを抱えていて前途を危ぶまれていた。そして3年後の今中間決算で3000億円を超える巨額損失を計上し露と消えることとなった。

このみどり銀行とは一体何だったのだろうか？何の為に生まれ何を残して消えてゆくことになったのだろうか？

今週の8日、来日した元米整理信託公社総裁が都内で「米銀は何故よみがえったか - 日本金融への教訓」と題する講演を行った。その主な内容が新聞に掲載され、参考になると思ったのでそのエッセンスを書いてみる。

まず第一に、米国の金融危機と日本のそれは「似て非なる」ものであるとし、米国では局地的な問題であったが日本では問題が全土に広がっているという認識を示している。これは日本の金融業界の体質とも云える思考と行動の同一性が齎したものと捉えることが出来る。金融業も多様性が求められているのだと思う。

次に金融システムの問題を回避するのはやっ

てはならないことが7つあるとし、「金融7つの大罪」としてまとめている。具体的に挙げると、

1. 仲間内融資や圧力融資等利益相反行為を行う
2. 独立した機関の監査を受けない
3. 監査結果の公表開示を行わず透明性が欠如している
4. 自己資本不足で営業している
5. 短期調達長期運用で調達と運用がミスマッチが行われている
6. デリバティブ等リスクの高い業務の比重を高めている
7. 融資を特定の業界に傾ける行動をとる

こうした7つの行動が健全な金融システムを揺るがす問題を引き起こすと指摘し、日本の場合年末までに終わるとされている金融監督庁の監査結果に注目していると言っている。

この金融監督庁の監査は、従来の大蔵検査と違って理論的には「初めての独立機関による監査」である。この監査報告が金融監督庁の試金石となるという訳だが、果たしてどういう結果となるだろうか。若し何か隠蔽したり公表しない事実が露見すれば、この元総裁は「世界に衝撃を与える」と警告している。邦銀の更なる信用失墜は避けられないかもしれない。

現在我が国の金融システムは、総額60兆円の公的資金投入を背景に安定を取り戻しつつあるように見える。しかしこの安定が、「束の間の安定」に終わるのか「再生へ向けての助走」になるのかは未だ判らない。

東京三菱銀行のように公的資金に頼らず、本店を第三者に売却したり他に資本増強の資金調達を模索する動きは評価を得られる行動だと思うが、総じて「公的資金頼み」の感は否めない。本当に「最後の危機感」はあるのだろうか。

今回の公的資金の投入は、今年3月の投入に続いて2回目の投入となる。今回は未だ国民の我慢を得ている。多くの国民は「仕方ない」と思っている。しかし、1回目投入の「自己資本10%超」の長銀は破綻した。若し今回失敗すれば「3回目」はないと思わなければならない。最後の最後だと思わなければならない。

その意味で「与えられたラスト・チャンス」を生かすか殺すか銀行は重大な岐路に立っている。二度と「みどり銀行」は見たくないのだ。